

これも論理的に詰め切れていないと思うのだ。多子だからこそ「いじめ」が多く発現するのではないか。教室をスモールサイズにすると、教師と生徒（小学校の「児童」はどうするのか）の関係が温かくなるほど現実甘いのか。子どもの「自由時間」があるからこそ、教師の目を盗んだ「いじめ」が起こりやすいのではないか。

悲しいことに、こうした疑問が本書の最初から最後までまっわりついて離れない。

■ 書 評 ■

宮崎和夫・米川英樹 編著

『社会と教育への視点』

(3) だれへのメッセージか

一言でいえば、本書の最大の弱点は、だれに向けてのメッセージかが定まっていなかったところにある。「いじめ学」の専門家か、それとも教師か親か。このポイントが中途半端だ。本書の論理も表現も、成熟されないまま世の中に出てしまった、という思いを抱く。

著者を深く尊敬するだけに、評者自身の悔しさが評の中に表れ出てしまった。

◆B6判 222頁 2,300円(税別)

金子書房

日本女子大学 牧野暢男

激しく変動し、教育や人間形成に関わる多くの問題を抱えている現代社会のなかで、教育社会学が、社会や教育関係者にどのようなデータや方策を提示できるかは、教育社会学という学問の意義や有効性に関わる重要なポイントである。したがって教育社会学には、社会と教育と人間形成の関連を、常に問い続けることが求められているともいえる。

本書は、「社会の変化が教育にどのような影響を及ぼすのか、あるいは教育の変化が、社会にどのような影響を与えるのか」という視点から、教育と社会の相互関係を社会的にマクロに捉えようとしている。具体的には、「情報化、国際化、高齢化、学歴社会、学習社会」という現代的視点から実体的・重層的にその本

質をあきらかにし、その中での教育の位置づけを探ること」が第1の目的であり、学力保障、ジェンダー、社会階層、学校組織と教員、教育改革という「直面する教育諸課題とその本質の理解、そして課題解決への展望を持つ」ことが、第2の目的とされている。本書は、11章から構成されており、編著者によれば、各章は、もっとも「脂ののりきった」関西人である若手研究者たちによって執筆されている。

内容を概略的に紹介しておく。全体は前半の第1編と後半の第2編から構成されており、第1編は、現代の社会と教育の課題として6章から構成され、第2編は、変動する社会と教育の課題として5章から構成されている。各章のタイトル

は、次のようになっている。

第1編 1章 現代社会と教育

2章 情報化社会と教育

3章 国際化社会と教育—「個性」を考える

4章 高齢化社会と教育

5章 学歴社会と教育

6章 学習社会と生涯教育

第2編 7章 学力保障と教育機会

8章 ジェンダーにおけるハビトゥスと資本

9章 社会階層と教育

10章 学校組織と教員

11章 社会変動と教育改革

1章は、教育社会学の研究の視角と課題及び現代社会の特質と教育の関係についての総論、2章は、社会の情報化とそれへの教育的対応の動向、3章では、外国とくにイギリスとの対比のもとに、国際化社会のなかでのわが国の学校文化の特質（その同化作用と排除作用）が明らかにされ、教育の個性化の必要性が力説されている。4章では、高齢化の状況と課題、それに対応する教育的課題が述べられ、5章では「学歴社会＝能力社会であるという前提」に立って、機会均等化、業績主義化、高学歴化という観点から日本の社会の実情が検討されている。また「学歴社会＝能力社会」という図式が肯定されるためには、どのような問題があるかが指摘され、日本の学歴社会を展望している。6章では生涯教育や生涯学習社会をめぐる様々な考え方が紹介され、課題が提示されている。7章では、学校における客観テストの合理性と正当性が論じられ、また教育機会の不平等の現わ

れとして、学力の地域格差の問題がデータに基づき明らかにされている。執筆者は、最近の学力観の変化をふまえて、学力保障の観点から知育の見直しの必要性を説いている。8章では、ジェンダー・ハビトゥスおよびジェンダー・キャピタルという概念を使って、社会のなかに「女らしさ」「男らしさ」が価値をもつジェンダー市場が形成されていることを、多様な研究結果や事例を引用して説明している。「男らしく／女らしくふるまうことによって利益をあげている人間がいること、それを支える場や制度があるために、社会はジェンダー化することを止め」ず、「表面的には男女差は減少しても、新たな別の形でジェンダー・ハビトゥスおよびジェンダー・キャピタルは再生産されていく」と執筆者はいう。9章では、データに基づいて、わが国における進学機会の平等化や地位達成の構造の変化が検討されている。産業化によって業績主義化、機会の平等化が進むという関係は見いだされることが明らかにされ、機会の平等化の阻害要因が指摘されている。10章は、学生と教授との対話形式をとった学校組織と教職論の解説である。最後に11章では、日本、アメリカ、イギリスの大まかな教育改革の推移とその比較が行われている。

概論書であるとは銘打っていないが、このような章だてと内容を見れば、本書がマクロな視点からの教育社会学の概論書風の書物であることに気づかれる人も多いだろう。論文といってもよい部分（5, 7, 8, 9章）もあるが、全体的には概説的な色彩のほうに勝っている。各章の